第五部　イザヤの召命

イザヤ 6 章

□アウトライン

1 章から 5 章までで、いくつかのテーマが語られたが、いずれもテーマの紹介程度にとどまっていた。1 章から 5 章は、いわば序論であり、テーマの詳しい内容が語られるのは、あとの 7 章から 66 章、そちらが本論である。

そして、序論（1 章から 5 章）と本論（7 章から 66 章）の間に位置するのが 6 章、ここでは、神がイザヤを預言者として召して彼に使命を与えた経緯が語られる。6 章の後に続く本論（7 章から 66 章）が神から託されたメッセージであることを、確認させるものである。

6 章のアウトラインは、次のとおり。

A)　イザヤが神の御座の幻を見る　　6：1～4
B)　イザヤがきよめられる　　6：5～7
C)　イザヤが預言者として召される　　6：8～10
D)　イスラエル民族に対するさばき　　6：11～13

A)　イザヤが神の御座の幻を見る　6：1～4

南王国ユダの王、ウジヤ王が死んだ年に、イザヤは天の神の御座に関する幻を見た。そこにはセラフィムという階級に属する天使たちが神を賛美していた。

1 節　**ウジヤ王が死んだ年に、私は、高く上げられた御座に着いておられる主を見た。その裾は神殿に満ち、**

- ウジヤ王が死んだ年・・・紀元前 740 年。この頃、西ではローマ建国草創期、初代の伝説的な王ロムルスが周辺部族との戦いに明け暮れていた。
- 主・・・「ヤハウェ」ではなく、「アドナイ」。全世界を支配する主権者なる神の意味合い。神は死ぬことのない、永遠の王である。

2 節　**セラフィムがその上の方に立っていた。彼らにはそれぞれ六つの翼があり、二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでいて、**

- 天使には大きく 3 つの階級区分がある。下から順に言うと、一般の天使、セラフ（複数形：セラフィム）、ケルブ（複数形：ケルビム）である。

- 一般の天使には、翼はない。人の目に見えるときには、若い男性の姿に見える。
- セラフは 6 つの翼、ケルブは 2 つまたは 4 つの翼をもつ。
- ユダヤ教ラビたちの伝承によれば、セラフィムの役割は、神の御座のまわりで、神を賛美する歌を歌い、飛んでいる二つの翼で楽器のように音を奏でること。

3～4 節　**互いにこう呼び交わしていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる。」その叫ぶ者の声のために、敷居の基は揺らぎ、宮は煙で満たされた。**

- 煙で満たされた・・・この煙は、神の臨在を示すシャカイナ・グローリー、主の栄光である。煙、雲、炎などと表現される。

B)　イザヤがきよめられる　6：5～7

1. イザヤは神を見て怖れを感じ、自分は死んでしまうと叫んだ
   5 節　**私は言った。「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の主である王をこの目で見たのだから。」**

2. セラフィムのひとりが祭壇の上から燃えさかる炭を取って、イザヤのもとに飛んできた
   6 節　**すると、私のもとにセラフィムのひとりが飛んで来た。その手には、祭壇の上から火ばさみで取った、燃えさかる炭があった。**

3. そのセラフはイザヤの口に燃えさかる炭を触れさせ、罪のきよめを宣言した
   7 節　**彼は、私の口にそれを触れさせて言った。「見よ。これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された。」**

C)　イザヤが預言者として召される　6：8～10

1. 主のことば
   8 節 a　**私は主が言われる声を聞いた。「だれを、わたしは遣わそう。だれが、われわれのために行くだろうか。」**

2. イザヤの応答
   8 節 b　**私は言った。「ここに私がおります。私を遣わしてください。」**

3.　イザヤへの主の指示

9～10 節　**すると主は言われた。「行って、この民に告げよ。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな』と。この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を固く閉ざせ。彼らがその目で見ることも、耳で聞くことも、心で悟ることも、立ち返って癒やされることもないように。」**

- イザヤの働きはイスラエルの人々から受け入れられない、これを覚悟せよ、という主のことば。イザヤがどんなに預言しても、民の心は肥えて鈍くなり、神の恵みを感知することができない。彼らは聞く耳を持たず、見る目を持たない。

D)　イスラエル民族に対するさばき　6：11～13

1.　イザヤの質問

11 節 a　**私が「主よ、いつまでですか」と言うと、**

- いつまでですか・・・私はいつまで、そのような成果なき働きをしなければならないのですか？　いつになったら、民は聞いてくれるようになるのですか？

2.　主の応答は、【そのような日は来ない】という意味を含んで、預言：さばきの第一波

11 節 b～12 節　**主は言われた。「町々が荒れ果てて住む者がなく、家々にも人がいなくなり、土地も荒れ果てて荒れ地となる。主が人を遠くに移し、この地に見捨てられた場所が増えるまで。**

- この預言の成就は、バビロン捕囚ではない。紀元 70 年、ローマ軍によってエルサレムが陥落し、イスラエル民族が世界に離散する出来事を預言。

3.　主の応答、預言：さばきの第二波、しかし、聖なる裔（すえ）が残る

13 節 a　**そこには、なお十分の一が残るが、それさえも焼き払われる。**

- 十分の一が残る・・・イスラエル民族は不信仰の状態で帰還、1948 年に独立宣言。ユダヤ人の世界人口のうち、十分の一が約束の地に。
- それさえも焼き払われる・・・大患難期

13 節 b　**しかし、切り倒されたテレビンや樫の木のように、それらの間に切り株が残る。この切り株こそ、聖なる裔**（すえ）**。」**

- 切り株、聖なる裔・・・大患難期末期において民族的救いを受けるイスラエル民族